

ひみつのともだち

「You raise me up」という歌が紹介されていました。「落ち込んで心がすっかりふさぎこんでいるとき、心が重荷でつぶされそうなとき、あなたが来て私のそばに座ってくれるのを、私は静かに待ちます。あなたが私を立ち上がらせてくれるから、私は山の上に立つことができます。荒海を歩くことができます。あなたが私を立ち上がらせてくれるから、私はより一層強くなれます。」というような意味の歌だそうです。

ここで歌われている「『You』とは誰でしょうか」の問いかけがありました。それは、友人、恋人、両親だれでもなり得ると思います、とその紙には書かれていました。その後、何度も「You raise me up」を聴きながら、私にとっての「You」とは誰なのか考えていました。

そんなころ、一冊の絵本と出会いました。『アルド・わたしだけのひみつのともだち』（ジョン・パー人ガム作、谷川俊太郎訳、ほるぷ出版刊、1991）です。少し中身を紹介しましょう。

「わたし」には、「アルド」という名の秘密の友だちがいます。でも信じてもらえないだろうし、みんな笑うだろうから、誰にも話せません。いじめられたとき、怖い夢を見て目をさましたとき、アルドが来てくれます。わたしだけの特別な友だちです。アルドのこと、すっかり忘れていた日もあるけど、わかってる。本当につらいことがあるれば、いつだって、アルドが来てくれるってこと。

訳者あとがきの一節にこうあります。人にはひとりひとりに守護霊がついているという考え方、古代人は例外なくそうした宗教的な想像力を持っていました。科学のもたらす合理主義に慣れたわたしたち現代人は、ともすればそれをばかにしますが、そのような想像力が生み出す風情は、わたしたちが考えている以上に、人間にとって大切なものだと思います。アルドを生み出す力はだれにでもあります。

就職活動中の大学生の息子と母親との会話の途中で、息子は突然しゃべることを止め、紙に書き出したそうです。口を利かずに、思いを文字にして母親に伝えたのでした。驚いた母親は、単身赴任中の夫のもとにその紙を持って相談に行きました。父親も急遽家に戻りましたが、息子との会話は彼の心が落ち着くまでには至りませんでした。短い滞在で父親は家を後にしました。そのあとで息子が言った言葉は、「お父さんともっと話したかった。」でした。息子は「とにかく自分の話を聴いてほしい。自分のことを分かってほしい」と思っています。「アドバイスがほしい、方策がほしい」ではないのです。「分かってほしい」なのです。自分が立ちあがるのにそばにいてくれる「You」を彼は求めています。何かあったら来てくれる「アルド」を求めています。

自分が望んでいないのに、辛いことや苦しいことにあたってしまうことがあります。それでも人は、そのままではいたくないので何とか乗り越えようと努力します。乗り越えようともがいているとき、自分を分かってくれる「You」や「アルド」が傍らに座っていてくれると助かります。想像の世界の「You」や「アルド」を、現実の世界に置き換えてみれば、きっと自分の周囲に「You」がいるはず。身近に「アルド」がいるはず。その人を頼りましょう。頼ることは恥ずかしいことではありません。「ねえ、ちょっと聴いて。聴いてくれるだけでいいから」と声を出してみましょう。

そして、私たちは誰もが、誰かの「You」や「アルド」になれるはず。そのときは「聴く」だけをしていきましょう。